

近代初期英国の霊性と母親像の転回 : D. レイ『母の祝福』(1616)を中心に

野々村, 淑子

九州大学大学院人間環境学研究院教育社会計画学講座 : 助教授 : 教育文化史

<https://doi.org/10.15017/3666>

出版情報 : 大学院教育学研究紀要. 7, pp.1-34, 2005-03-22. 九州大学大学院人間環境学研究院教育学部
門

バージョン :

権利関係 :

近代初期英国の霊性と母親像の転回

— D.レイ『母の祝福』(1616)⁽¹⁾を中心に —

野々村 淑 子

構 成

はじめに ～「人間形成を決定する幼少期の母子関係」の歴史化

I. 超自然的諸力の衰退と母となること／母であること

1. 「魔術的」儀礼の衰退
2. 母の助言書の成立
3. D.レイと『母の祝福』

II. 『母の祝福』の世界における霊性の支配

1. 祈ることの重視
2. 俗世, そして自然・身体への嫌悪
3. 霊と自己との境界の曖昧性

III. 『母の祝福』の母親像

1. 霊による教育と母の間接性
2. 女性が霊性に近づくこと

おわりに ～母役割の系譜における『母の祝福』の位置

はじめに ～「人間形成を決定する幼少期の母子関係」の歴史化

人間形成過程において子ども期の母親との関わりが重要である, 特に, 乳幼児期の母との身体的・精神的関係が極めて決定的に影響力を及ぼす, という認識は, 果たしてどこからきたのだろうか。この認識は, ささまざまな認識や態度と同様に, 社会や文化の変容のなかで歴史的につくられてきた, ひとつの観念に過ぎない。現在多くの人がこの命題に疑念を持たないとしたら, ひとつの社会通念ともいえる。

子育てにおいて母役割が決定的に重要な影響を及ぼすという認識を歴史化するという仕事は, 教育学研究において急務である。というのは, この通念が当然視されたまま, 教育の慣行や制度が営まれ, それについての議論がなされ, 対策が講じられ続けている限り, 教育の根本は家庭における母子関係にあるという命題に, 結局のところ引き戻されてしまうからである。その結果, 学校や家族, 社会といった子どもの育ちを支える世界の成立基盤や権力構造などの議論を通り越した, 母子

や親子の心理的・身体的関係が、中心的な問題としてクローズアップされることになる。近年の「心理主義化」は、学校という社会的構築物であることが自明なはずの制度でさえ、教師と生徒の心理的・身体的関係のとり方、つまり教師個人の態度や振るまい、接し方自体に教育の如何を問うことを促している。そして更に、学校教育の限界論とともに、子どもはやはり家庭において根本的に教育されるはずだという、先の通念が繰り返される。この家庭での子育ての重要性を絶えず確認する言葉が発せられるたびに、母役割の決定性という命題は、疑われることもなく、教育の語りのなかに埋め込まれ、問題を吸収し続けるのである⁽²⁾。

本研究は、大きな課題としては、教育の語りのなかで、このように重要な機能を果たしている、子育てにおける母役割の決定性の観念を歴史化するという目的のもとに始められている。母親と子どもとの関係性という、人間の意識や態度といった深層の部分の歴史化が、非常に困難であることはいままでもない。それが、母はいつでも子どもを愛している、ということを様々な時代にわたって見出すことに終わってしまうのは、いくつかの研究が通ってきた道である⁽³⁾。ここで問わねばならないのは、母の子に対する愛の有無ではない。子どもの人間形成過程において、母との関係がこれほどまでに特権的に重要性をもつに至った経緯、その認識の構築過程である。

そのような問いに対し、本稿では、子どもの教育に際する母の役割が重要視されていない時代、すなわち16世紀から17世紀の英国⁽⁴⁾において、様々な理由付けによって、しかし慎ましやかに、母からの子どもへのメッセージを主張し始めた書物群のひとつに焦点をあてる。そして、そこに表現されている世界観、人間観、教育観とその揺らぎを再現しつつ、母親像の転回の内実を明らかにする。

16世紀から17世紀の英国は、ルネサンス、宗教改革という近代社会の形成に大きく関与したとされる社会的、文化的変動の時代を迎えていた。しかし、Iにおいてみるように、人々がくらす社会は未だ前工業化の段階であり、多くの人が農村地帯に住み、食糧生産に携わり、防ぎようもなく襲ってくる不幸——自然災害や火災などの災害、病気、貧困……——に対してなすすべを持たずにいた。だからといって、彼らが私たちに比べてより不幸であると断定する資格が私たちにはないことはいままでもない。彼らは、彼らなりの不幸に対する態度や振る舞いを身につけていた。

子どもを産み育てること、すなわち出産および子育てを、不幸ということはいささか問題ではあろう。キース・トマスがいうように「(当時の親は) 子供は幼児のうちに死ぬ可能性が、十分あることを知っていた」⁽⁵⁾。しかし、その不幸に(その他の貧困・病気・突然の災害と同様)「もしわれわれが突然過去に投げ出されたとしたら、当然おじけづいてしまうにちがいないが、そのように当時の人々もおじけづいていた、と時代錯誤の誤りを犯してはいけない」のである。当時の人々の姿勢が不幸に対する「無頓着・平静」⁽⁶⁾であったかどうかは検討の余地がある。としても、近代初期英国の親たちにとって、子育ても、その前に子どもをもつ(出産の時を迎える)ということも、突然の不幸によって中断される可能性に満ち満ちていたのである。そしてもし子どもが最も危険な時期を生き抜いたとしても、子どもにも自分にも、またいつ災害が降りかかってくるかもわからないような日常を生きていた。キース・トマスに倣い、それをいちいち脅威として怯えては日々くら

していけないような状況下で、彼らはそれを深刻ととらえることなく生きていた、と考えるのが順当ではないだろうか。

17世紀初頭の英国人がどのようなことを感じながら生きていたか、ということに答えることは非常に難しい。ただ、そうした生活のなかで、災いを避け、幸運を祈りつつ行っていた集団的慣行は、彼らの生活の支柱をなすものであったといえよう。Iにおいて紹介するように、出産や子育ての営みに突然襲う不幸や、自らの力では対処し難い運命の力に対して、中世の人々が身につけていた振る舞いは、さまざまな節目に行う儀礼や魔術的・呪術的慣行、いくつかの聖遺物への奇跡的な効能を信じ、それに一定の行いをなすことであった。そうした態度、それを支える信仰体系に対して、徹底的な批判を繰り返したのが、宗教改革者である。さまざまな儀礼や魔術を否定され、出産や、子育ては、他の不幸（病気や災害…など）と同様に、個々人が、超自然的な諸力の媒介なく向かい合う営みに変容せしめられていくのである。もちろんこの過程は、宗教改革者のみに帰せられることではない。宗教改革という社会変容自体が、世界観、人間観の大きな転換期に顕在化したうねりであるからである。

17世紀前半期に成立した「母の助言書」なるジャンルの書物群は、あたかもこの転換に呼応するかのように出現した。本稿が分析するD.レイによる『母の祝福』（1616）は、それら17世紀において出版され、その後多くの再版を数え、E.ジョスリンによる『まだ見ぬ子どもへの遺書』（Joceline, Elizabeth, *The Mothers Legacie to her unborn childe*, London: John Haviland, 1624）と並んで、「母の助言書」群の代表的な存在とされる書物である。女である自分が「書く」という冒険にあえて挑む理由や弁解を長々と書き綴りながら、母としての義務が語られ始めるのである。以下にみるように、レイは、子育てにおいて男性よりも重要な役割を担おうという意志などは全くないということを、あえて強調する。「母の愛（motherly love/zeal）」があるならば、「不完全な存在」としての女であっても、この書物を著すこともゆるされるだろう、と謙虚に、慎ましくやかに書かれるのである。

近代初期英国の母の助言書に書かれている母の役割が、宗教教育として整理されうるような、聖書を読むこと、信仰生活の導きであったことは、チャールトンによって既に指摘されていることである⁽⁷⁾。しかし、本稿で明らかにされるように、その教育を支える世界観、人間観は、母の子育て役割、教育役割として私たちが想定するようなものでは全くない。教育のあり方も全く異なっている。チャールトンがアリエス、ストーン等の研究を批判しつつ行った、母役割は17世紀以前にもあったのだという主張は、より厳密に再検討しなければならないのである。それは、別稿においても指摘したように⁽⁸⁾、その主張ではアリエスやストーンの批判とはならないからだけではない。近代初期において、19世紀以降の母親像とは全く異なっているが、しかし確実に、母が幼少期の子どもの内面世界との関わりを深め、その子どもの人間形成を決定するような領域へと近づいたからである。その微かな動きは、16世紀から17世紀にかけての、人々の生活習慣を変えうるような、世界観や運命観、信仰体系の変容、そこに生きる人間の身体や魂のあり方についてのゆらぎのなかで生じた過程である。

母と子の親密な関係は、子どもに対する母役割が女性によって意識され主張されはじめた近代初期の英国においては、子どもの教育への重要な要素とはされていなかった。少なくとも、当時多く書かれた、男性による教育書がそのように論じていたことは、これまでの研究においても指摘されてきたことである⁽⁹⁾。そのような考え方が優勢であった時代において、女性が母役割を論じたことは、母役割の歴史上注目すべき転換期であったことは確かである。しかし、本稿においてみるように、『母の祝福』の描き出す母の姿は、厳密な意味での、子育てにおける母役割の重要性の主張であるとはいえない。母による直接的な子どもへの関与を認めることはできないからである。あくまで神に祈るという神の国における救済の手段を勧めるのみだからである。そこには、子どもと母親との、直接的な影響関係はみられない。

本論は以下のような構成をとる。Ⅰにおいては、母となり、母であることの歴史のなかで母の助言書群が書かれ、読まれたことの意味を、出産、育児に際する慣行やそれを支える信仰体系のゆらぎのなかを探る。その上で、『母の祝福』の書誌、構成等について確認する。

次に、『母の祝福』において、母が子どもに最も伝えなければならないものとして重要視されたことを、それが依って立つ世界観、即ち敬虔なプロテスタントとしての世界観、人間観、自然観において明らかとする。Ⅱにおいて、『母の祝福』を成立させている世界観、人間観、自然観の内実を提示し、Ⅲでは、そこにあらわされた母親像、およびそのようなイメージの構築を可能にした宗教改革期の女性の位置について、特に信仰生活と女性との関わりを中心に考察する。

結論を先取りして本論で明らかにされることをここで確認しておこう。『母の祝福』の世界において、教育、すなわち子どもの人間形成に直接関わるのは、聖霊あるいはイエスであり、母親ではない。母親は、宗教教育に携ったが、教育を行ったわけではなく、聖霊による教育の成功を願い、祈ることを奨励するのみであった。母は、子どもを変え得るような力を持っているとはされないのである。19世紀以降に浮上してくる、子育て論上における母親役割礼讃のような母親像は、ここにはみられない。

ただ、宗教改革の波は、女性たちの信仰生活と共に、自らの子どもとの関係を大きく変えた。神との関係、自らの運命をゆだねる力への願いが、祈ることという庶民が近づきやすい手段によって叶えられるとしたプロテスタンティズムの思想は、当然のことながら、教会権力の中枢から排除されていた女性に対しても、霊性、聖性への接近を可能とした。それゆえに、女性は、自らの救済のために祈ることとともに、そしてそのことを子どもに伝えること、宗教教育に携わることができるようになったのである。すなわち、霊性、聖性という、それまで自らは立ち入ることのできなかつた領域について、少なくとも発言することが可能となった。確実に、子どもの内面世界に踏み込む歩を進めたということができるのである。

Ⅰ. 超自然的諸力の衰退と母となること／母であること

まず、ここでは近代初期英国に暮らす人々にとって、子どもを産み育てることがどのよう

なことであったのかについて、その信仰体系や慣習についての研究により整理する。その上で、そのような時代にあって母の助言書というジャンルの書物が成立した背景を探り、なかでも代表的な『母の祝福』の書誌、構成について具体的に明示する。

1. 「魔術的」儀礼の衰退

16世紀から17世紀のイングランドにおける、人々の生活に根づいていた信仰体系の変容過程を描写した大作『宗教と魔術の衰退』の冒頭において、キース・トマスは以下のように、当時の社会を描写している。

16世紀および17世紀のイングランドは、依然として前産業化社会であった。その本質的特性の多くが、今日のいわゆる“低開発地域”のそれに酷似していた。人口は相対的にまばらで、1500年にはイングランドそしてウェールズでは、おそらく250万人、1700年になると550万人になったと思われる。17世紀後半になっても、経済はきたるべき産業化のきざしをほとんど見せてはいなかった。なるほど今や大いに商業化した農業は存在し、繊維産業は活発、石炭の産出は十分になされ、植民地貿易が増大してはいた。しかし、人口の大多数は依然として食糧生産にたずさわりの、資本主義的体制づくりはまだ未発達であった。いわゆる“工場”のたぐいは、ほとんどなかったのである。典型的な生産単位は、いまだ小規模な作業場の域をはず、家内工業が繊維製造の基本形態というありさまであった。…

…チューダー朝、スチュアート朝のイングランドの人々は、現代の水準から判断すると、苦しんだり病気にかかったり、そして若死にする傾向が強かったということについては議論の余地がない。貴族はたの階級の人々よりも恵まれた存在であったろうが、その貴族の間ですら、1650年から1675年にかけて誕生した男子の誕生時での平均寿命は、29.6歳であった。今日であれば、ほぼ70歳であろう。この貴族階級の子どものうちの3分の1は5歳以前に死に、…1662年に推定したところでは、大都市ロンドンで生まれ生存している100人の子どもにつき、36人が最初の6年のうちに死に、ついで24人がその後10年以内に死んでいる。…16世紀中頃には、誕生時の平均寿命は田舎の人々の場合、40歳から45歳に達していたという可能性がある。しかし、当時の人々は精密に人口調査をするまでもなく、自分の人生は短く、その寿命を十分に生きぬくには状況が不利であることを知っていた。「30歳もしくは35歳以内で死んだ人は、それを越えた人よりも多いことがわらう」とある著述家が、1635年に述べている。生きのびた人でさえ、一生涯絶えず苦痛に悩まされたということもありうる。文献をみると、多くの人々が慢性的になんらかの病気にかかっていたらしいことがわかる。…⁽¹⁰⁾

この叙述のあと、トマスは、当時の偏った食事、栄養不足の状況、慢性的な病気、貧困、火災などの災害についての記録を詳しく挙げている。このような生活世界において、病気や死、あるいは突然襲いかかってくるが防ぎようもないような、天災や火災などの災害、不幸は、彼らの日常生活に

染みこんでいた。彼らが執り行なっていた様々な慣行、儀礼、それを支える信仰体系は、これらの災害や不幸の頻繁な世界において、彼らが幸運を祈り、超自然的な力の威力を信じていたことの証左であろう。

本稿の主題である、幼少期の子育てに関する儀礼については、様々なことが執り行なわれていたことが徐々に明らかとなっている。中世の西欧社会において、子ども期、すなわち人生のごく初期の段階は、人生過程全体のなかで、近代以降ほどには特別に重視し配慮する期間ではなかったことは、アリエスによって指摘された最も重要な点のひとつである⁽¹¹⁾。シャッハーらが明らかにしているように、近代以前の人々が年齢段階の区別意識を持っていたことは確かである⁽¹²⁾。しかしそれは、乳幼児期、すなわち人生の初期段階にのみに配慮が集中するようなものではなかった。誕生から死までの諸段階にわたる配慮、もしくはふるまいが慣習化され、生活の一部に取り込まれていた⁽¹³⁾。

彼らが行っていた、後には魔術的・呪術的と批判されることになる慣習や儀礼、すなわち「超自然的な力を中世教会が、思いのままにすることができると考えられて」いた⁽¹⁴⁾こと、中世教会が、そのための「魔術的力を秘めた、多種多様な世俗的な目的に用いることのできる巨大な宝庫」⁽¹⁵⁾であるかのように、私たちには思えることは、トマスが指摘している通りである。しかし、これもまたトマスがいうように、宗教改革者側からの非難のままに、中世の教会典礼は魔術的な迷信に満ちていたと判断するのも誤りである。なぜなら、西欧の教会典礼の歴史は、古代から中世にかけて、「異教」の祝祭や儀礼をキリスト教の聖性に同化、吸収、合理化（キリスト教の理に叶えていく）していく過程だったからである。その意味で、「一般に教会が認めなければ儀式は「迷信」となった。認めるとそうではないのである」⁽¹⁶⁾。従って、教会の聖性が認める範囲で、という限定付きで、中世の人々は降りかかってくる災いを防ぎ、無事安穏を願うために様々な行動をなしていたというべきであろう。しかし、人々にとっては、教会の聖性の正統性よりも、現実生活における願いがリアリティをもっていたといわれる。

堅信礼、結婚の祝福、病人の聖別、死者の埋葬などと同様に、出産前や後の儀礼、洗礼などの乳幼児期の儀礼が執り行われていた。以下は、15世紀の人々に、出産に際して用意されていた、超自然的力への助力祈願のための慣行の一例である。

聖人はいつも、日常の起こりうるさまざまな事態を取り扱うために、待機していた。妊婦が利用できたものは、多くの修道院がその目的で保管している聖なる遺品、たとえばガードル、スカート、コートなどであった。そこで妊婦たちは産婆に促され、聖マルガレタもしくは聖母マリアに呼びかけ陣痛を和らげてもらおうとしたり、生まれる子が是非男であってほしいのなら、聖フェリキタスに加護を祈りなさいと言われた。ヘンリー七世の王妃は出産の際、ある修道士に6シリング8ペンスを支払い、聖母のガードルをつかった⁽¹⁷⁾。

また、無事出産を終えた後にも、安産感謝式が用意されていた。長くなるが、当時の慣行と教会の

態度についてトマスの叙述から引用しておこう。

教会の儀式のうち、社会的意味の強いもう一つのもは、産後の婦人に対してなされる安産感謝式 (churching women)、もしくは産後の清め式 (purification) である。それは、その女性が母親として新しい役割を担ったこと、および一定期間の儀式的遮断と回避の後に夫と再び性的関係をもつこと、この二つを社会が認めることを表象するからである。過激なプロテスタントの改革者は、後にこの儀式はイングランド教会において最も非難を免れえない、カトリック的な遺産の一つであるとみることになるのであるが、中世の聖職者たち (churchman) もまた大量のエネルギーを注いで、母親が清められるまえに家から出ること、空や大地を見ることは誤ったことであるという信仰などの世俗の迷信を打破しようとしていた。教会の選んだ立場は、安産感謝式は無事に出産ができたことを神に感謝する儀式であるとするのであって、出産後その儀式が挙行されるまでの期間についてはいろいろととりざたされたが、そのどれも支持しようとはしなかった。また産後の女性は安産感謝式が行われるまで、外に出てはいけないということも容認することはなかった。…しかし、一般の人々にとって安産感謝式は明らかに、その先行するユダヤ教の儀式と密接に結びついた清めの儀式であった。

根っからのプロテスタントは、後にこの儀式そのものを非難することになるが、それは「素朴な人々の心に多くの迷信的意見を生み育てるからで、それはたとえば、子供を産んだ女性は不潔であるというような意見である」。しかし、もっと偏見のない見方をしていたら、その儀式は原因というよりむしろそうした意見の結果だと見ていたであろう。処女であること、もしくは少なくとも性交渉を差し控えていることは依然として聖なることの一般に容認された条件であった。…女性に安産感謝を施すという儀式、それは衆目のみるところでは、半ば魔術的な意味を帯びていた。したがって、教会は潰そうとしたが、潰すことができなかった信仰、安産感謝式の前に出産の床で死んだ女性はキリスト教による埋葬を許すべきではないという信仰が生まれたのである。清め式という考えは、宗教革命の時代になっても存在していた。17世紀末になっても、ウェールズの各地からの報告では、「普通の女性に向かって安産感謝式はウィッチクラフト除けのお守りではないといっても、それ以外のものと見なすことはほとんどないし、彼女たちは自分たちが式を受ける前に歩いた所に草はほとんど生えることはないと思っている」というのである⁽¹⁸⁾。

この安産感謝式を終えた後、新生児は一週間以内に洗礼の儀式をうける。この儀式は「救済に不可欠なものであり、洗礼を受けずに死んだ子供は通例地獄の辺土 (limbo) に送られ、そこで永久に神の姿をみることが許されない…これが教会の教えたことであった」⁽¹⁹⁾。しかし、人々の洗礼の慣行を支えていたのは、成長や長生きの願いが叶えられるからという信仰であり、どの水が効力があるかということまでもその信仰のなかに埋め込まれていた。

こうした、教会の思惑とは異なる信仰体系のうえに執り行なわれていた儀式の数々は、人生の初

段階にわたり、あるいは季節の諸時期にわたり、それぞれの時期の意味を再確認し、災いを少しでも避け、無事に過ごすという人々の願いとともに慣行化されていたといえよう。中世教会は、それを根絶することではなく、キリスト教の信仰体系のなかに組み込むことによって権威を示していた。他方で、人々はそうした行動をとることによって、少なくとも自分の力ではどうしようもない災難から逃れることができると考えていた。

それが、トマスが活写したように、迷信、魔術的であるとの批判の対象となり、中世教会の権威とともに否定されていくのである。しかしながら、プロテスタンティズムはキリスト教信仰の刷新・清新運動であって、聖性を否定したのではもちろんない。キリスト教が重要視し、教会を支える聖性を否定するものではなかった。信仰と聖書、というプロテスタントを代表するふたつの特徴は、ここで意味をもってくる。聖書を読むことと、プライベートな空間で孤独に祈ることが、無事平穩に暮らすという俗世の幸福ではなく、神の国での救済のために不可欠な行いとして要求されることになるのである。改革者にとっては、孤独な祈りとは、パブリックな場で衆人の目前で執り行っていた様々な行為よりも、より純粋な信仰の証であったであろう。しかし、個々の人間の内的な信仰は、個々の心のなかで完結されてしまうことによって、次第に聖性の威力を失わせてしまうことになる。このことは、母の助言書群に共通した、聖性を死守しようとする悲痛な言葉にみてとることができるだろう。

本稿で注目する『母の祝福』の著者 D.レイ (Dorothy Leigh) は、プロテスタントの敬虔な信者として、プライベートな祈りを守り、その大切さを子どもたちに伝えることを最も重要なこととしている。キース・トマスが描写したような迷信や儀式などには一切言及しない。説教師による説教、パブリックな場における信仰を確認する集まりの機会さえ、奪われてしまうかもしれない当時の切迫した状況を、レイは描いている。そのなかで、神の国へと誘われるべき存在として仕立て上げること、それがレイにとっての子育ての究極的な目的である。そのために、聖書の言葉を絶えず参照しながら、神と子イエスと聖霊の力が遍く世界における祈りの重要性を説く。母はそのことの価値を子に伝えることのために存在しているかのように、それ以上の子どもへの関わりを控える。従って、レイにとって、母となること、そして母であることは、もはや願いをこめた儀礼によって慣習化されたようなことではなかったといえる。その代わりに、聖なる領域を保持し、その領域において母としての存在意義を控えめながら主張したといえるのではないだろうか。

2. 母の助言書群の成立

信仰生活の重要性とともに母親の役割を主張する書物群が、17世紀初頭にまとまった形で書かれ、出版を重ねた。女性によって書かれたものが多かったために、この著作群「母の助言書」は、文学史、文芸批評の領域で、女性作家を再評価すべく復刻版やアンソロジーの編集が行われている⁽²⁰⁾。

女性作家に注目する研究は、女性も社会の圧力に抗して、17世紀から「書くこと」に従事していたのだという点を強調する。その際に、後述するように、控えめながら、母親としてならば、母の愛を表現することであれば、許されるだろうという弁解の言葉が必ず書き込まれていることは重要

なことである⁽²¹⁾。女性が「書く」ことの歴史においては、母というテーマによってそれが可能になった、ということが出来る⁽²²⁾。

しかし翻ってそれはまた、子どもを産み、母となり、子どもの成長を案じる人生の一つの段階に至った際に執り行なっていた儀礼や慣習の喪失を埋めるかのように書かれ始めたともいえるのである。一世紀前の母親たちならば、ほぼ従っていたであろう儀礼や慣習が「魔術的・呪術的」として退けられ、祈ることのみが、救済の要件として、唯一人々にのこされた信仰の証となりつつあった。『母の祝福』をはじめとする母の助言書群は、母としての子どもへの言葉を、信仰の中心である「祈ること」を伝えるために記され始めた。しかも、その多くが遺言として、つまり自らの死ぬ運命の前に、子どもに最期に残していく言葉として書かれたのである⁽²³⁾。

フリードマンがいうように、宗教改革運動を支えることともなった教育革命、つまりリテラシーの勃興が、限定的であったとしても女性にも影響していたことも確かであろう。ヴィヴェスら人文主義者たちの教育論が、男性とは異なった文脈、すなわち母、妻としての役割を十分に果たすためという目的のものであったとしても、女性に向けても発せられていたことも、この母の助言書という女性を主な著者とする著作群の成立要件になっていたことも指摘しておく必要がある⁽²⁴⁾。

しかしながら、母親の子どもに対する関係やふるまいの系譜において、このジャンルの成立は、様々な聖遺物にかけのおまじないや清めの儀式などが、非難の声により消滅しつつあった（か、意味のないものと捉えられるようになった）最中において、登場した⁽²⁵⁾。この書物群が再版を重ねたことは、少なからず、それを「読むこと」も人々にとって、儀礼の喪失を埋め合わせるものであったともいえよう。

3. D.レイと『母の祝福』(*The Mother's Blessing: or the godly counsaile of a gentlewoman, not long deceased, left behind her for her children: containing many good exhortations, and godly admonitions profitable for all parents, to leave as a legacy for their children, London, for John Budge, 1627*)⁽²⁶⁾

ドロシー・レイ (Dorothy Leigh) は、この『母の祝福』という著作のみによって著名であるが、生誕年、逝去年共に明らかではない。そして父親 (William Kempe) についても、エセックス州フィンチングフィールドに住んでいたことしかわかっていないようである。また、夫についても、「キャディズのエセックス卿に仕えるチェシュアのジェントルマン」であるラルフ・レイ (Ralph Leigh, 1616年に死去) であるということのみが記録されている。ただ、彼らには3人の息子 (George, John, William) がおり、三男のウィリアムは後に、サフォーク州グロトンの牧師となり、マサチューセッツ植民地初代総督であるウインスロップの手紙に登場していたことがわかっている⁽²⁷⁾。

D.レイは、当時の作家としては、たとえばヴィヴェスやエラスムスなどの男性、マーガレット・モアやマーガレット・カーヴェンディッシュなどの女性たちのように、その出生や生活、活動

歴について多くを知られているわけではないことがわかる。

著者についての情報の少なさは対照的に、この『母の祝福』は1616年の初版以来、多くの再版がなされた。ブリティッシュ・ライブラリーには、1627年の第7版、1629年、1630年、1634年、1636年、1656年、1663年、1674年、1707年、1718年までの所蔵が確認できる⁽²⁸⁾。17世紀の母の助言書群を代表するポピュラリティをもった、この時期の女性史研究においてまず言及される著作であり、多くの人々がこの書物を手にとったはずである。

『母の祝福』は、まずその冒頭に、王女エリザベス (Elizabeth, Princess [Elizabeth Stuart], 1596–1662) に対する献辞から始まる。王女エリザベスとは、スコットランド王ジェームス6世 (イングランド王ジェームス1世, 1566–1625) の唯一生き残った長女であり、のちにファルツ選帝侯およびボヘミア王フリードリヒ5世の妃となった人物である。当時の王家の婚姻の例にもれず、この結婚も政略結婚には違いなかった。ただ、その成長過程と身につけた教育、もって生まれた美貌、そして生家の勢力を背景としたその大胆な言動において、エリザベスは、「完全無欠なプロテスタントのヒロイン」、あるいはさらには「ヨーロッパにおける鬭争的プロテスタンティズムのシンボル」として崇拝されたといわれる⁽²⁹⁾。先のD.レイの人生歴にみる限り、この王女エリザベスとの接点があったとは思えない。従ってこの献辞は、「プロテスタント」としての信仰のシンボルとして置いたと考えられよう。

5頁にわたり、「イングランドの喜び」としての「王冠」に対する献辞が述べられた後、三人の息子たちへの送る言葉が書かれる。3頁足らずのものではあるが、「父を神に召された」息子たちに対し、「俗世 (world) における快樂を追い求めず、神のもとにあるあなたたちの成長を見守り、そして天国にいるあなたたちの父と会うことができるように…彼の意志を全てみすために…」この書物を書いている、という力強い言葉にあふれている。

「私自身が、彼 (息子たちの父) の信仰の証言者であり」、「私自身は、いずれこの俗世から離れるけれども、あなたたちはこれから俗世に入ろうとしているのがわかっているのに、私はこの義務をどのように果たしたら良いのかわからずにいるのです。だからせめて、この書物 (a few lines) をあなたたちに残して、靈的な善と世俗的な善の双方 (both spiritual and temporal good) において、父があなたたちに望んだことを示し」ていこうというのである。息子たちへの言葉は以下のような、控えめではあるが、しかし同時に、母としての自信にみちたフレーズで結ばれている。

ここでは、全ての畏れをさておき、私は自分の不完全さを世に晒すことに挑もうと思います。このことによって、どのような非難中傷を受けようとも私は気にすることはありません (… I have adventured to shew my imperfections to the view of the world, not regarding what censure for this shall be laid upon me, …)。私はこの著作において、一人の愛あふれる母として、そして忠実なる妻として、私自身を示しましょう (I may shew my selfe a loving Mother and a dutifull wife)。そして、そうすることによって私は、死に至るまで

はずっとあなたたちを守っていた父の保護のもとに、あなたたちを送り届けるのです。

常に、夫（息子たちの父）の遺志に言及しながら、その父亡き後の義務は、母が行うことを強調するのである。ただし、ここにあるのは、俗世での生き方ではなく、天国に召され救済されることを最大の主題としていることは明らかであろう。

この後、「子どもたちへの忠告」として、3頁にわたる、韻律を踏んだわかりやすい教訓の詩が書かれる。「花々の蜜を集める勤勉な蜂」に譬えて、この書物から学んでほしいという訓告である。

そして、索引をおいて、45章、271頁にわたる母の祝福の言葉が綴られていくのである。ここで、この書物の全体像を把握するために、既述した献辞も含めて、構成を提示しておきたい。

TO THE HIGH AND excellent Princesse, the Lady ELIZABETH her Grace, Daughter to the high and mighty King of great Britaine, and Wife to the illustrious Prince, the Count Palatine of the Rhine; D.L. Witheth all grace and prosperity heere, and glory in the world to come.

TO MY BELOVED Sonnes, George, Iohn, and William Leigh, all things pertaining to life and godlinesse.

Counsell to my Children.

The Contents of this Booke

Chap.	Fol.
1 The occasion of writing this Book, was the consideration of the care of Parents for their Children.	1
2 The first cause of writing, is a motherly affection.	3
3 The best labour is for the food of the soule.	7
4 The second cause is, to stirce them to write	14
5 The third cause is, to move women to bee carefull of their children.	16
6 The fourth cause is, to arme them against poverty.	17
7 The fift cause is, not to feare death.	19
8 The sixt cause is, to perswade them to teach their children.	23
9 The seventh cause is, that they should give their children good names.	27
10 Reasons of giving good names to children.	42
11 Children to bee taught betimes, and brought up gently.	45
12 Choyce of Wives.	47

13	It is great folly for a man to mislike his owne choice.	52
14	How to deale with servants.	56
15	Patience is necessary for Governors of Families.	60
16	Meanes to further private Prayer.	63
17	Lets.	65
18	Helpes against the former lets.	67
19	To pray often.	70
20	Not to neglect private Prayer.	76
21	Men become worse for want of using good means.	79
22	To lay hold on Christ, is the best thing in the world.	84
23	What need is there to speake much of Christ.	87
24	The unthankfulness of rich men a great sinne.	98
25	How to reade with profit.	100
26	The preeminence of private Prayer.	102
27	The benefit of acquaintance with God.	104
28	How long we have need of private Prayer.	106
29	Who pray privately.	108
30	The way to rule our corruptions.	111
31	The benefit of the Holy Ghost.	120
32	God accepteht weake Prayer.	127
33	No certaine rule for private Prayer.	150
34	Divers men troubles with divers sinnes.	152
35	Be not hurt by a little temptation.	155
36	Idlennesse and covetousnesse to be avoided.	167
37	A dangerous let of Prayer.	171
38	Reasons of casting our care upon God.	190
39	Against immoderate care.	200
40	The poyson of outward things.	214
41	Prodigalitie set out.	221
42	Difference betweene an act & habit of sinning.	228
43	The service of the Sabbath ought to be publike.	232
44	The honourable calling of Ministers, stained by worldliness.	239
45	The right use of goods.	265

以上からわかるように、この書物は、章、節、項などの階層的な構成、そして理論的かつ厳密な

記述がなされているわけではない。

第2章から9章まで、この書物を書いた理由が述べられている。確認してみよう。

母の愛の故に。

息子たちが書くことを励まされるように。

女性たちが子どもに注意深くなるように。

息子たちが貧困に打ち勝てるように。

彼らが死をおそれぬように。

彼らがその子どもたちを教育するようになるために。

彼らがその子どもたちに良き名前を与えることができるように。

ここで最も注目すべきは、第5章の「女性たちが子どもに注意深くなるように (to move women to be carefull of their children)」であろう。理由のなかで、唯一自分の息子たちではなく、世の女性たちに言及し、子どもたちへの配慮を促している箇所だからである。この章全文を引用してみよう。

3番目の理由は、女性たちを勇気づけるためです（どうかこの女性たちが私の大胆不敵さを恥じたりしませんように）。彼女たちが、自分たちの弱点を見せるのを恥ずかしがらず、しかし、男性たちに第一の、そして主要な場所を与えますように。私たち女性は、第二の場で働きますように。なぜなら、告白するならば、罪は、私たち女性によって子どもたちに伝えられたのですから。私たち女性は、自分たちがどんなに注意深くキリストを求めているかを示さねばなりません。私たちと私たちの子どもたちから罪が消し去られますように。そして、私たちはどんなに畏れているかも示さなければなりません。自分の罪がこの地の奥底の最も低いところに堕ちてしまうように。そのために私たちは、子どもたちに、キリストに従うように求めねばなりません。キリストその人が、子どもたちを崇高なる天国に誘ってくださるのだから。

ここに書かれている女性は、母親としての特性、あるいは影響力を持つゆえに子どもに関心をもつのではない。「女性によって子どもたちに罪が伝えられる」がゆえに、なんとかその「罪」を、自分たちと子どもたちから消し去るべく、キリストに従わなければならないというのである。「主要な場所は男性に」という言葉が、この章に書かれること自体、女性が子どもへの配慮という事柄に縁遠かったということができただろう。つまり、子どもに注意をむけ、その行く末を案じるのは、父に期待された仕事であった。それゆえに、女性たちは、その第一の主要な場所を奪うことは許されないのである。

レイがここで言っているような「女性の弱さ」、つまり「弱き性」としての女性像は、近代初期の教育論においてしばしば登場する。それゆえに、女性は子どもの教育という仕事に相応しくない

といわれたのである⁽³⁰⁾。レイは、いわばそれを逆に利用することで、女性が子育ての領域へと近づく道をつくろうとした。母親は罪を子どもに伝えてしまった、それゆえに自らその罪を拭うために心を砕かねばならない、という論理である。

また、第8章「彼らが子どもたちを教えるようになるために (to persuade them to teach their children)」の「彼ら」とは、息子たちであり、教育するのは彼らが父になったときのことである。従って、母親による教育とは言っていない。ただ、そのことについて母（教育される子どもにとっては祖母）が論じているわけなので、母役割と全く関係ないとはいえない。では、そこで述べられる教育とはどのようなものなのか。

6番目の理由は、次のようなことをあなたたちに懇願し、切望し、また幾分かは命ずるからです。それは、あなたたちの全ての子どもたち、男の子どもであっても女の子でもであっても、自分の母国語で聖書を読むことができるように、若いうちから学習させなさい。というのは、それが真の信心深さに達するのに大きな助けになるからです。[MB:25]

ここでレイが、女性として関与しようとした教育とは、母国語で聖書を読むということであったとすることができるだろう。

その他、子どもの命名法や、妻の選び方、奉公人の扱い方、家族の管理者としての心得など（10～15章）、レイの言葉にならえば俗世的な（temporal）な事柄に対する助言が並んでいるかのように見える。しかし、19章以下はほとんど、祈りについての詳細かつ繰り返される助言であり、俗世での成功の罪深さ、罪、誘惑についての警告、神と子イエス、聖霊を讃え、それに従うべき勧告である。章題のみによっても、この書物が有する人間観、世界観が浮かび上がるだろう。子どもの命名についても、もちろん聖書の教えに添ったものであり、家族との関係についても、キリスト教徒としての心得が基本である。全てにわたって、聖書のさまざまな節を参照しながら、その引用と、レイによる神の賛美、人間存在の罪と救済のための祈りの重要性の言葉が繰り返されている。

以上のように、『母の祝福』は、あくまで俗世での生活、人生とは遊離した、天国の世界における善、神と子イエスと聖霊の恩恵に与るための助言に満ちた、なかでも祈ることの重要性を強調した書物であるといえることができる。

Ⅱ. 『母の祝福』の世界における靈性の支配

ここでは、『母の祝福』における、敬虔なプロテスタント信者としての世界観、人間観を浮き彫りにする。ここに書かれている人間像、そして自己像は、現在自明視されているような、母性を前提とした幼少期の母子関係における自己のイメージとは、全く異なるものである。世界を支配する靈性と自己の身体との境界線が曖昧で、相互に浸透しあうような流動的な自己像がここにはある。

1. 祈ることの重視

Iにおいてみたように、内容構成を一瞥しただけでも明らかなのが、この書物が「祈り」とりわけて「プライベートな祈り」を重要視していることである。第19章から以下、20、26、28、29、33、37章は、直接に祈ることを章の主題にしている。祈ることに規則はないこと、そしてとにかく祈ることがいかに重要であるかを、多くの紙面を割いて説いているのである。

近代初期、宗教改革期の英国の母親が、子どもの宗教教育について関心をもち発言していたことは、チャルトンによる研究によって既に明らかになっている。「祈ること」を勧める母の言葉は、こうした助言書だけではなく、手紙などにも記されていた⁽³¹⁾。母の役割は、子どもに祈ることを忘れずにいるように諭し、救済を祈ることであったのである。第26章において、レイは「プライベートな祈りの卓越性」について次のように述べている。

最も優れた徳と幸福が、プライベートな祈りによってもたらされます。何人も、何をもってしても、人からそれを奪うことはできないのです。聖書が、誰かによって奪い去られたら、それを読むことはできません。また、説教師がどこかに連れて行かれたら、その説教を聞くことはできません。そして会衆 (company) から離されたら、パブリックな祈りに参加することはできません。でも、プライベートな祈りは、いつでもだれにでもできることです。それによって、人は神と語り、自らの嘆きを神に伝え、全ての困難への助力を請うのです。[MB:102]

この叙述からは、聖書や祈りの形態をめぐる当時の信仰生活の混乱をみてとることができるだろう。レイにとって、プライベートな祈りは、プロテスタントとしての儀式ではなく、神との対話を可能にする唯一の手段であった。パブリックな祈りは、パブリックであることによって否定されたのではなく⁽³²⁾、どのような状況下においても神との関係を保つことができる場として、その価値が確認されている。

では、「プライベートな祈り」によって可能となる、「神との関係による恩恵 (The benefite of acquaintance of with God)」(第27章)とはどのようなことなのだろうか。

ああ！なんと神々しく幸福な関係であろうか！ その関係が長く続けば続くほど、あなたたちの信仰は強くなり、神への献身は本心からのものになり、そしてあなたたちの人生はより神聖なものになるのです。そしてこのことによって、神はあなたたちをキリストにおいて受け入れ (this makes God accept you in Christ), そして、あなたたちは、キリストがあなたがたが何かを願うならば、父はお与えになる (「ヨハネによる福音書」第16章第23節) と言われたときのキリストその人になるのです。[MB:104]

祈りは、神との関わり (acquaintance) の可能性をひらき、人はそれによって、神に嘆きを訴え、困難を取り除く力を請い、神によって願うものを与えられる。この書物のサブタイトルに掲げられ

ている「ジェントルウーマンによる神の助言 (The godly Counseile of a Gentle-women)」は、このような、神による人間の内的な苦悩や願いへの応答に関する助言であるといえる。

ジェントルウーマン、つまり母レイは、息子たちの苦悩や願いについて、息子たちに何か具体的な行為をなすとは書かれていない。母の義務は、神とのこのような関係を可能にするべく、息子たちにひたすら祈ることを勧めるのみなのである。

2. 俗世、そして自然・身体への嫌悪

祈り、神による助力をひたすらに願うレイの目には、神の支配する世界が自分が願うほどには重要視されていないことが確実に見えていた。巻頭におかれた息子たちへの言葉においても、「俗世 (world) における快樂を追い求めず、神のもとにあるあなたたちの成長を見守り、そして天国にいるあなたたちの父と会うことができるように…彼の意志を全てみたくために…」⁽³³⁾と書かれていたように、レイは、俗世への嫌悪感を露わにしている。俗世での快樂、出世、幸福は、レイが希求する天国での救済という目的においては、かえって妨げになる。先述したように、17世紀初頭は、いまだ産業化以前の社会であったとはいえ、すでに交換経済、消費社会の兆しがみえはじめていた⁽³⁴⁾。

ただし、経済生活の興隆が、信仰生活の価値を貶めた、とここでいうことはできない。信仰の証が、祈ることに限定されつつあった時代である。そのような時代に、祈ることを大切にしない人々が多いという不満がレイによって書かれた。このことからわかるのは、人々が（それまでは従っていた）祈るということを忘れ始めたことではない。そうではなく、独りで祈るという行為がそれだけ危ういものだというのであろう。レイの言葉には、このような当時の社会状況に対して信仰の重要性を訴えようとする思いが語られていく。

人間 (man) は、俗世 (earth) に生きるものであり、そしてサタンはこの俗世の王子 (Satan being the Prince of this earth) なのです。彼は、人間を、この俗世界 (this earthen world) に相応しい俗世的な心 (earthen minds) にしてしまうことに努力するのです。人間は、生まれながらにして俗世的であり (man being earth by nature), そして一般的に俗世の事柄を愛してしまう傾向にある (generally inclined to love earthly things) からです。そして彼 (サタン) は、この俗世への愛 (this earthly affection) のなかに、人間を容易くおぼれさせてしまうのです。それは、あたかも、急な丘を駆け下りるかのようなものです。人は、ゆっくりとのぼるよりも駆け下りる方が易しいものです。神の御心の他に、この俗世的な自然を助けるものはありません (Hee hath nothing to helpe his earthly nature, but grace:…)。それゆえに、祈らなければならないのです。そうしなければ、神の御心を受けることはできないのです。しかし、多くの俗世のことに従い、祈る暇もない人がいます。夜、聖霊との会合において神の法について黙考しなければならない時でさえ、俗世の何かについて、あるいはあれこれの売買契約や買い物について考えているのです。[MB: 174]

「俗世 (world, earth)」といった言葉は、天国や神の世界と対極的な、サタン、悪魔が住まい支配する場所とされ、そこへの「愛」は否定される。その世俗的世界への愛は、人間にとって「自然 (by nature)」なものであることを確認した上で、その自然性を否定することを求めている。

この引用の直後において、「金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい」(「マタイによる福音書」第19章第23節) という聖書の一節を引きながら、レイは、「俗世の仕事 (earthly business) [MB: 176]」に忙しく祈りの時間を惜しんでいる人々を批判する。

彼らは、勧められるままに、神について話します。しかし、その心は俗世にあるのです。商売のこと、売買のこと、またいかに金持ちになるか、家族を維持していくのはどうしたらいいか、といったことを考えているのです。[MB: 176]

聖書の以下の一節は、第三章の章題にもなっているが、繰り返し引用され、世俗の事柄や欲望のために働くことを批判している。

朽ちる食べ物のためでなく、いつまでもなくならないで永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。(「ヨハネによる福音書」第6章第27節) [MB: 7, 177]

また、第35章「小さな誘惑に傷つけられぬように」においては、「愚かな金持ち」のたとえ(「ルカによる福音書」第12章第13-21節)によって俗世での経済的成功の愚かさを強調する。畑が豊作だったので、倉を建て替えて穀物や財産を蓄えて楽しんで暮らそうとした金持ちに、「愚かな者よ、今夜おまえの命は取り上げられる」と神が言われたという逸話から、イエスが言った以下の言葉をそのまま引用し、俗世の欲望を戒めるのである。

自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりのだ。[MB: 165]

『母の祝福』には、「heavenly」、「godfulness」、「godliness」などと言い換えられつつ称えられる神の領域、靈性の支配する領域を重視する言葉が充満している。と同時に、それはまた、そのような靈的世界が人々の「心」のなかでは重要視されない社会への焦燥感、「earthly」の事柄が優勢な世界への危機感の表われでもあるといえよう。そのような危機は、「悪魔の誘惑への敗北」という「人間が生まれながらにもっている弱さ」「人間すべてがもっている罪」に帰せられていく。その「罪」を贖うものは、ひたすらに祈ることしかない、と言われるのである。

3. 靈と自己との境界の曖昧性

女性作家に注目した文芸批評の研究は、レイやジョスリンなどによる母の助言書の多くが、「死すべき母である自己」を想定した、いわば自己否定のうえに築かれた自己という存在によって書か

れていることに注目している。これは、書くことが許されていなかった女性の立場によって説明されることが多い。つまり、女性であっても、母として、さらには自分が死んでしまうかもしれないことを示唆した上であれば、書くこと、少なくとも愛する自分の子どもに対して言葉を書き残すことならば許されるだろう、という弁解のための形式としてとらえている⁽³⁵⁾。また、クローフォードら母親の社会史研究においては、現実的に頻繁であった出産に際する死について、数字（死亡率）などよりもリアルな証言なのではないかと論じている⁽³⁶⁾。それらは、確かに私たち現代人には説得力がある。しかし、Iの最初において触れたように、何を思っただけでこのような形式がとられたかについて、私たちは明確に判断できないのである。

死すべき運命であるという自己否定の上に書かれた、すなわち女性に求められた慎ましさを装うために「遺書 (legacy)」という形式をとった、とみた場合、私たちは、『母の祝福』の冒頭において、すぐさま戸惑うことになる。それは、Iの3においてみたように、「わたし自身 (I my self)」という言葉が頻発されるからである。

しかし、実はこの「私自身」の強調を、私たちが考えるような、「認識主体、判断主体としての自己」⁽³⁷⁾として判断することはできないのである。レイの語りのなかの人間像、そして自己とは、子イエスと聖霊に浸透し、また浸透され、そのことによって神に近づくことができるような存在である。ここにある世界は、そうした霊的人間ともいべき存在と、その周りに遍く在る聖霊 (Holy Ghost, Holy Spirit) に満ち満ちた世界なのである。

わたしの子供たち、キリストがあなた方のうちに形づくられるまで、わたしは、もう一度あなた方を産もうと苦しんでいます（「ガラテア人への手紙」第4章第19節）。そして、母が（子供を大いなる傷みのなかで産み出した母が）、キリストがそのうちに形づくられるまで、再び産みの苦しみを味わうからといって、誰が非難できるのでしょうか。[MB: 11]（傍点は引用者による、以下同様）

この一節は、母が子供の教育という「第二の出産」⁽³⁸⁾ともいべき仕事に携ることの理由を聖書に求めている部分である。聖書においては、「産む」のは使徒パウロという男性であることは指摘しておく必要がある。「産む」身体が、女性に限定されるものとはされていないからである⁽³⁹⁾。しかし、ここではむしろ、「子供たちのうちにキリストが形づくられる」という部分に注目したい。キリスト、あるいは聖霊が、人間のなかに入り込む、浸透し一つになる、あるいは逆に、人間の体がキリストの体の一部となるという記述は、『母の祝福』の至る所で、聖書の言葉によりつつ表現されている。霊的存在と人間の身体との境界が曖昧で、互いに浸透しあうような流動的な人間観であり、自己認識である。

聖霊は、あなたたちに光をもたらし、あなたたちとキリストを結びつける。そして、あなたたちが、自分の情動を制御し、自分自身の主人となるべく恩寵を与えるのです。また逆に、聖

靈が書き込まれていない人々は、自分自身の汚らしい情動に振り回され、その僕となっています。しかしもし、あなたたちが聖靈を抱いているのであれば、主人が奉公人にするように、自分自身に指示を出すことができるのです⁽⁴⁰⁾。[MB:121]

ここに描かれている人間は、神と子イエスと聖靈の、靈性が浸透することによって、やっと自らの「情動 (affection)」を制御し、「自分自身の主人となることができる」ような存在である。このような、靈性との境界が曖昧な身体をもつ人間観は、以下にあるような「コリントの使徒への手紙一」第6章第13-20節の「聖靈の住まいである体」に明確に示されている。レイも、この箇所を冒頭を引用し ([MB:211])、このような身体観、そして人間像を前提としつつ、祈りの重要性を説いていく。

食物は腹のため、腹は食物のためにあるが、神はそのいずれをも滅ぼされます。体はみだらな行いのためではなく、主のためであり、主は体のためにおられるのです。神は主を復活させ、また、その力によって私たちをも復活させていただきます。あなた方は、自分の体がキリストの体の一部であるとは知らないのか。キリストの体の一部を娼婦の体の一部としてもよいのか。決してそうではない。娼婦と交わるものは、その女と一つの体となる、ということを知らないのですか。「二人は一体となる」と言われています。しかし、主に結びつく者は、主と一つの靈となるのです。みだらな行いを避けなさい。ひとが犯す罪は全て体の外にあります。しかし、みだらな行いをする者は、自分の体に対して罪を犯しているのです。知らないのですか。あなたがたの体は、神からいただいた聖靈が宿ってくださる神殿であり、あなたがたはもはや自分自身のものではないのです。あなたがたは代価を払って買い取られたのです。だから、自分の体で神の栄光を現わしなさい。

以下に挙げるのも、靈性との境界が曖昧で流動的な身体観、人間観が現われている箇所である。

キリストのなかにある人間とはどんなに素晴らしい生き物であろうか。[MB:90]

…私たちがそこからつくられたアダムの地は非常に暗く、外では私たちは何もはっきりとは見えない。私たちは、私たち自身のうちに聖靈をもたないとしたら、キリストのもとへ行く道も見いだせず、父なる神のもとへと至ることもできないのです。[MB:118]

私は神に祈りましょう。…聖靈はあなたにキリストをもたらし、キリストは彼の父をあなたにもたらすように。[MB:120]

あなたたちは、あなたたち自身について絶えず注意深くなければなりません。それは、この

注意をしなければならないような小さな事柄のためではなく、永遠なる、偉大かつ最も光輝く神の王国のためにです。そこでは、あなたたちは、甘く愛に満ちた全能なる神の存在を享受し、終末なき天の王国のイエス・キリストの一員となるでしょう。そして、そこでは、祈りを続けている限り、サタンも俗世もあなたたち自身の肉体 (Flesh) もあなたたちを困らせることはないのです。…[MB: 81]

ここにある、霊的人間像、つまり霊が浸透し霊に浸透していく境界なき自己（あるいは境界が曖昧な自己）のイメージは、中世から近代初期においてみられた、宗教的言説や行動における身体観とそれを前提とした自己像と、明らかに共通するものである。女性預言者が神との交感によって想像妊娠をなし、多くの人々がそれを信じた。このような集団的経験にみられるのは、流動的で境界なく身体から意味があふれ出ているような身体観である。18世紀以降に解剖学を通じて定着していく、構造や機能をもった固定的で可視的な身体ではない⁽⁴¹⁾。流動的で境界の曖昧な身体観は、民間の信仰体系だけではなく、17世紀以前の医学において権威をもつ学説として君臨していた、外界の宇宙 (マクロコスモス) と呼応した人間の身体 (マクロコスモス) を環流する体液説にも共通してみられる⁽⁴²⁾。

少なくとも17世紀前半期において、構造や機能をもった固定的で可視的な身体観、およびそれと平行に成立する、身体とは独立した精神をもつ自己、個の意識が、明確には確立していなかったことは確かである⁽⁴³⁾。そしてレイもまた、聖書の言葉に依りつつ、世界に遍く霊や神の子イエスと自己との融合という人間観をここで示そうとした。神と子イエス、そして聖霊の支配する霊性が遍く浮遊する世界において、その霊と人間の身体が融けあうことが、レイにとっての至福の状態であった。その状態が、人間がその自然な情動、俗世への欲望を断ち切ることができる、悪魔の支配から自由である状態であった。そして、それが可能であるのは、祈ることによってのみなのである。

Ⅲ. 『母の祝福』の母親像

1. 霊による教育と母の間接性

Ⅱにおいてみた、霊に満ち満ちた世界にある、イエスや聖霊と融合する人間像において、教育とはどのようなものとして認識されていたのだろうか。それは、以下にみるように、霊と人間が溶け合う状態への作用そのものなのである。

…あなたたちのなかには、自然においては (by nature) 何も善はありません。神の栄光によって、私はあなたたちを和らげ、謙虚に、忍耐強く、慎み深く、そして勤勉に働き、怠惰になることなく、そして行儀の悪い (naughty) 子供にならないようにするつもりです。そしてこれは、あなたたち自身 (your selves) の、あなたたちの感情 (affection) との間の勝利でなければなりません。そして、あなたたちがあなたたち自身を支配することを教えるのは、

聖霊なのです (the holy Ghost will teach you to master your selves)。あなたたちが、全ての不道徳な肉への情動に屈して苦しむことのないように教えるでしょう。[MB: 124]

この叙述が、先に引用した「コリントの使徒への手紙 一」第6章第13-20節からくるものであることは、レイ自身が欄外に注記していることからわかる。

ここで重要なのは、聖霊が、自己を支配する術を教えるということである。決して母が教えるのではない。母は、ひたすら祈ることを勧めることによって、神の栄光によってこの自己支配術が習得されることを願うばかりである。もちろん、このような聖霊による教育は、神の御業であるとされていることはいうまでもない。

…俗世と悪魔の誘惑をたち切り、毎日神のもとへと訪れなさい。そしてその足下に自身をひれ伏し、どんなに私たちが信仰の弱き存在であるかを告白し、私たちのか弱さを伝え、そして素直に神の助けを請うのです。神が、その力で悪魔や俗世、そして私たち自身の弱さに対抗し、私たちが強くしてくださるように。[MB: 75]

この母と子の関係が、19世紀に書かれるような、母の子どもに対する愛への絶対的信頼とはほど遠いことは明らかである。例えば、以下に引用するのは、19世紀初頭のアメリカで氾濫した母役割を礼讃した育児書のなかでも典型的存在とされる『母への手紙』⁽⁴⁴⁾の一節である。

…天高き志は、キリスト教徒の母を、その「栄光ある聖徒のための市民」を育てている母を激励します。他の全ての望みも栄誉も儂いものです。母親が、その使命を神聖なものとしてできるように、天は彼女に特権と力を与えたのです。母親は、自分が変えることを運命づけられている魂（子どもの魂；引用者）の本性を学ぶのです。天によって彼女は、まるで創造主の手から今開花したばかりの花のがくを調べるかのように、その魂（子どもの魂；引用者）をまず最初に念入りに見ることが許されているのです。…

天の英知のもとで女性は、人生の最も美しい季節の魅力を、愛という幸福に捧げるように定められているのです。かつて夢中になったふざけた娯楽や自分勝手な楽しみとは離れ、母としての威厳にむかって高く昇っていくように励まされているのです。新しく生まれた愛情によって、夜も眠れぬ心配事をも乗り越えていくよう元気付けられており、過去の時代の数々の模範例によって、その仕事のための力を与えられています。それはなによりも、神の声によってその最も神聖な義務への忠誠を厳命されたということなのです。

私たち女性は、自らの天職は、教える (teach) ことであるということに自覚し、優越性においても、力 (power) の程度においても、教える能力 (faculty of teaching) ということからいっても、神によって分け与えられた領域 (department) において、母とは第一のものであると認識しています。優越性においては、彼女は創造主の次席にいます。生徒たちに及ぼ

す力という点では、競うものがないほど限らないものです。教える能力の点では、変化させる愛という特権を授けられているのです。その光り輝く領域が、新たに生命を与えられた魂とその不死の運命である限り。母は、自らに与えられたこの高らかな特権を蔑ろにしてはいけません。あるいは、怠惰で楽な生活を要求しようとしたり、自分の個人的な努力はあまり価値がないなどと力なく言ったりしないようにしましょう。…⁽⁴⁵⁾

ここにあるのは、「子どもの魂」への影響力を運命的に、そして特権的に有している母という存在である。先のレイの言葉とはほど遠いことが確認できるだろう。

この『母への手紙』は、女性によるものであるが、男性によっても同様の母親像は書かれている。グッドリッチによる『炉辺の教育』⁽⁴⁶⁾も、19世紀の家庭性および母役割礼讃現象を支えた書物群のうち代表的なものである。その表紙には、幼い子どもたちの肩に優しく手を添えた母と、書物を手に、少し年長の子どもに窓の外の自然界について語りかけている父の絵が描かれ、その下に、以下のようなフレーズが書かれている。

母は心の領域を支配し、父は知性の領域を支配する。

このことを本文中で述べている箇所にはこうある。

母は幼児期の神 (DEITY OF INFANCY) である。…父は子ども期の神 (DEITY OF CHILDHOOD) である⁽⁴⁷⁾。

ここにある「母は幼児期の神」であるという言葉からは、17世紀のレイの言葉では神や霊のみが有している力を、母親がとって代わって果たすことができるという認識を読み取ることができるだろう。

17世紀初頭に書かれたレイの語りのなかでは、悪魔によって世俗の欲望に惑わされ、そそのかされている人間たちへの危機に際し、それを母親の力を持って抵抗しようという認識はない。人間の心を見ることができるのは「キリスト」([MB: 6]) であり、そして「罪深き本性」を見ることができるとも「キリスト」のみである ([MB: 134])。

多くの人々が、ファリサイ人のように、皆に見られるように人々の面前で祈ります。しかし、「彼らは既に報いを受けている」とキリストは言われます ([マタイによる福音書] 第6章第16節)。これは、キリストがパブリックな祈りを嫌っているからではなく、キリストは彼らの心がわかるからです (he (=Christ; 引用者による) saw their hearts)。[MB: 61]

従うべきは「イエスの助言[MB: 135]」であり、『母の祝福』における母は、それを可能にすべく、子どもに祈ることの重要性を論ずることに徹する。母は、霊による教育を称え、間接的にそれを促す

のみなのである。

2. 女性が靈性に近づくこと

以上みてきたように、この『母の祝福』を含む、17世紀初頭における母の助言書群の成立は、子どもの教育における女性（母親）の決定的重要性の確立をそのまま示すものではない。もちろん、女性が、子どもの教育について発言し始めたことは確かであり、それは、母親の役割を主張するひとつのステップであるといえる。しかし、子どもの教育において決定的な役割を果たしているのは、神の恵みのもとにある聖霊であり、それは、神の子イエスを、子どものなかに形づくることであった。あるいは、「聖霊を子どもの内に受け入れること」([MB:26])であった。従って、母親は、そのような子どもの内的世界への、靈的存在の浸入や介入を促す存在としてのみ、在るのである。

この祈ることの勧めは、母親、あるいは女性としての役割を主張するために書かれたものであると結論づけることはできない。この書物は、「子どもたちの父の死」に際し、父の代わりにその遺志を継ぎ、義務を果たすべく書かれたからである。しかし、レイの語りの世界においても、確実に性差による生き方の制限に対する違和感が存在する。しかしそれは、社会生活、レイの言葉でいえば世俗の生活世界における性差ではない。あくまで靈性、聖性の領域における性差の観念である。

私が男だったら、そして神の言葉の説教者 (Preacher of Gods Word) だったら、と思わずにはられません。そして、あなたたちのなかで誰かが、説教者になってくれたら、と願います。[MB:128]

私はこう言わねばなりません。私は、あなたたちのうちで誰かが説教者になってくれることを、どんなにお願い、そして神に祈っているのでしょうか。[MB:239]

この願い通り、三男のウィリアムが牧師となったことは、先に見た通りである。ここには、靈性、聖性の領域において性差が存在し、そのことをレイが口惜しく感じていたことが現われている。レイは、できることなら、自らが「神の言葉の説教者」になることを望んでいたのである。

靈性、聖性の領域における男女の平等性について、トマス・キースが興味深い論考を残している。そこでトマスは、17世紀英国に隆盛したプロテスタントのなかでも、メソジストや洗礼派、あるいはクェーカーのような急進的なセクトが、女性による説教を認めながら支持層を拡大していったことを明らかにしている⁽⁴⁸⁾。これによれば、女性たちは、プロテスタントの信仰の担い手として、祈りによって靈的世界に近づくことを望んだといえるだろう。プロテスタンティズムは、それを可能とした。教会の男性に独占された位階的制度に依らずに、プライベートな祈りのみによって神との関係を取り結ぶことができるようになったからである。

このような、17世紀の女性と信仰の関係からみると、母の助言書を書くこと、そして読むことは、女性にとって、子どもの靈的教育を媒介としつつ、靈性への接近を可能にするものであったともい

えよう。さらに、この霊性への接近の可能性を女性に拓いたことは、男性に近づいたというよりも、聖職者以外の男性よりも、女性たちの方にむしろこの霊的領域に接近させたのではないかと、とも解釈できるようなことをレイは書いている。

世俗世界の優勢に相對し、對抗し、神の領域に適う力を息子たちに身につけさせようとする言葉に、この『母の祝福』が満ちていたことは、これまで明らかにしてきたとおりである。ここで、レイは、冒頭において強調した「子どもの父（夫）の遺志を継ぐ」という義務を、少しばかり超えるようなことを書き込むのである。

父は息子たちに学校（school of learning）に行き、神と国王と国家に奉仕するために学ぶように言うでしょう。そして、私もまた、そうした必要なことをあなたたちに与えるでしょう。勤勉な学習に努力しなければなりません。そうしなければ何も得ることはできないでしょう。…しかし、あなた方がそれらを全て習得したとき、さらに価値あることが残されているのです。それが、私がここで述べ、あなたたちに書き残していること全てなのです。[MB：180]

父の領域をあえて超えると言っているわけではない。しかし、一般的な父の姿を描きながら、母は学校での学習を習得した上で、さらに求められるより価値のあることを教えるという役割を負っていることをほのめかしている。すなわち、俗世での人生ではなく、来世における救済を願い、その力を身につけさせるような力、具体的には祈ること、なのであるが、それを教えるのが、ここで最も伝えたいことであるという確信である。母が担うことのできることは、一般的父が通常重視する事柄よりも価値があるのだという主張が、謙虚ななかにも確実に書き込まれているといえよう。

『母の祝福』においては、女性が「弱き性」「劣った性」であることを否定されることもなく、子育てにおいて男性（父親）よりも重要な役割を担うということを明言されることもない。ただ、子どもの来世の幸福を願い、信仰の重要性を伝えていくことを主題として書かれている。

『母の祝福』を始めとする母の助言書群は、信仰の世界、神と関わる霊性の領域に、女性が踏み込むことを可能とするような宗教改革期の情勢によって、新興セクトにおいて数多く存在した女性説教師と同様に生み出されたものといえる。女性は、男性聖職者と肩を並べることはできないが、その他の世俗の事柄に心を奪われ、祈る暇もない男性よりは、聖性、霊性の領域に接近し語る機会を得た。それゆえに、一般的父よりも価値のあることを、母は伝えるのだという言葉も書かれたということができよう。

しかし、これまで明らかとしてきたように、母は、霊の支配する教育において、直接的な役割を担うことはない。すなわち、チャールトンのいうように母役割は近代初期から存在した、と即座にいうことはできないのである。

おわりに ～母役割の系譜における『母の祝福』の位置

本研究は、教育の語りのなかで重要な機能を果たしている、子育てにおける母役割の決定性の観念の歴史化を課題として始められている。すなわち歴史のなかでつくられた「人間形成を決定する幼少期の母子関係」という観念の形成過程を明らかにするという課題である。

16世紀から17世紀にかけての英国は、「近代初期 (early modern)」と時代区分されることが多いように、ルネサンス、宗教改革という大きな変動のなかで、近代社会、近代文化、近代的生活様式へと移行しつつある時期であった。

本稿で注目した『母の祝福』を代表とする母の助言書群は、このような時期にまとまった形で出版された。Iにおいてみたように、それは、一世紀前の母親ならばほぼ疑いなく従っていた、出産や育児に際する儀礼、災いを避け、幸運を祈願するような慣習が、徐々に消滅しつつある時期に出現した。母親は儀礼に代わって、助言書を書き、読むことになったともいえる。しかし、このような母親の子どもへの関心は、母親役割は近代初期においてもみられたということ直ちに意味するものとはいえないのである。

『母の祝福』は、安息日以外の教会儀礼には一切触れない。IIに明らかとしたように、神と子イエス、聖霊の支配する、靈に満ち満ちた世界のなかで、罪から逃れ、イエスや聖霊と融合し溶け合い、幸福な天国への召されるために、ひたすら祈ることを子どもたちに諭している。「弱き性」としての女性は、俗世への欲望を断ち切るために、祈ることを勧めるのみ、それ以上の関与はしない。

この助言書において、子ども、つまり人間に浸透し、影響力を持っているのが、母ではなく、神と子イエス、聖霊、つまり靈的存在であることは、IIIにおいて明らかとした通りである。母親は、子どもの心、子どもの自己形成において、何の力もなく、何をなすことも期待されてはいない。「弱き性」としての女性像をそのまま書き込み、そのような母親に子どもの心に関与する力を持たせるなどは眼中にはないのである。ゆえに、この時期において、母の助言書が書かれたからといって、母役割が存在したと単純にいうことはできないのである。これが、本論が『母の祝福』という助言書を精査した結果、チャールトンの研究に対して提示することができた点である。

しかし、人間の救済、来世での幸福を決定する靈性の領域について、母親が間接的に子どもに説き諭すことに乗り出したということではある。このことは、確実に、子どもの内面に母が関与していく方向へと向かう一歩であったといえる。靈による教育、子どもの自己を形成する教育という領域へのベクトルを進んだからである。男性聖職者のみが立ち入ることを許されていた領域に、母が接近した。父ではなく、母がより子どもの人間形成に近い存在となる兆しを、ここにおいてみることができるのである。

「弱き性」という近代初期に強調された女性像は、一方では女性の教育役割を限定したと言われてきた。そのような言説が多く書かれたことは確かである。しかし、『母の祝福』においては、この女性像は全く逆の機能をもたされている。世の母親たちに子どもへの関心を持ってほしいと論じている箇所では、子どもに罪が伝わったのは、男性ではなく「弱き性」である母からである、それ

ゆえに、その罪を拭う責任が私たちにはあるのだ、という論理である。

魔術的儀礼によって教会が有していた権威に対するプロテスタンティズムの撲滅運動は、聖書を読む力を獲得し、プライベートに祈ることを怠らなければ、誰にでも神との関係を取り結ぶことができることを可能にした。この聖性、靈性における平等性が、世俗の女性に対しても開かれようとした⁽⁴⁹⁾ことは、『母の祝福』における、控えめながらも力強い言葉に明らかである。宗教改革がもたらした信仰生活の変容によって、母となる／母である女性も神との対話という至福に達することができるようになった、ということができる。

しかしながら他方で、このことは、上でも触れたように、母親たちから、子どもを産み育てるといふ先々の運命が不明瞭な経験の前に、それまでの母親ならば疑いなく従っていたであろう儀礼や慣行の数々、つまり超自然的力への他力本願的な依存の機会を奪われることでもあった。これはすなわち、母であること／母となることの不安や運命を、全て自らの神への祈りのなかに引き受けることを意味していたといえる。『母の祝福』を始めとする母の助言書群が出版され続けたことは、母親たちが、少なからずこのような事態のなかで、助言書を読むことに心を傾けたことを推察させる。

近代初期の英国において、それまでの超自然的諸力に運命を委ねていた儀礼や慣習が、迷信として一蹴、一掃され、神の摂理が、人生、そして来世を決定するようになりつつあった。キース・トマスが明らかにしたような大きな変化のなかで、母親像は、わずかではあったが、しかし重要な転回をなしたといえる。それまでの社会においては、人間の非力では対処し難く、運命を超自然的な諸力に委ねていたような領域の事柄、つまり子どもの命や人生の行く末について、儀礼や慣行に従うことでは無事を祈願できなくなっていくのである。神の摂理による救済、つまり自らの絶え間ない祈りによってのみ、自らの内面と神との関係を望ましい状態にし、子どもの救済を望むことができるという状況に移行しつつあったといえる。D.レイは、敬虔なプロテスタントとして、それを切望し、子どもに祈ることの重要性を説いた。ここでは、神とイエスと聖霊が世界を支配し、子どもが地獄に堕ちないように自己を管理する力を持たせるのも神である。しかし、19世紀には、そのような神に代わる力を本来的に持つような母親像が、抵抗なく称えられるようになるのである。

祈りの重視による神の内面化は、それまでは教会権力が様々な儀礼を介しつつ、しかし人々はそうした行動そのものに他力本願的に依存しつつ災いを避けようとしていた出産や子育ての営みを、個々の母親の内面の問題へと吸収し限定していく、ひとつの大きな転換を促したといえることができるのではないか。母親が、子育てにおける様々な問題の根幹として万能視されるという事態は、このような歴史の断面から見ると、そこに含まれた意味の大きさを指摘せざるを得ない。それは、人間の運命が、いったんは神への祈りに吸収され、そして徐々にその神の代わりとして、母が自分の子どもの心を支配し、人生を左右することを期待されていくようになる過程である。17世紀初頭の助言書のみからは、もちろんその先の展開については明言することはできない。しかし、この書物は、このような大きな過程のなかの一断面を照射しているといえよう。

〔付 記〕

この論文は、平成15-16年度科学研究費補助金 若手研究 (B) 研究課題名「近代初期英国の女性と教育の関係構造に関する基礎研究：コンダクトブックを史料として」の一部である。

注

- (1) 注26に指摘したように、本書の初版は1616年である。しかし、本稿では、ブリティッシュ・ライブラリーに所蔵されているなかで破損のない1627年版（第10版）を使用した。
- (2) 人間形成過程において、人生のごく初期が、しかもその時期の「パーソナリティ」の形成と親子関係、特に母子の関係が、決定的に重要であるとする思考の普及と定着において、精神医学と心理学の貢献度は大きい。教育の心理学化（文化の心理学化、「心理学的人間の登場」）において特筆すべきアメリカにおける教育の医学化（精神医学化）については、Cohen, S., *The Mental Hygiene Movement, The Development of Personality and the School: The Medicalization of American Education, History of Education Quarterly* Vo. 23, No. 2, Summer, 1983, pp.123-149を参照。コーヘンは、19世紀末から20世紀にかけての世紀転換期の精神衛生学運動が、精神的疾患理論の中核をパーソナリティにおき、パーソナリティにおける混乱が疾患の徴候として見なしたために、人間形成にとっての子ども期の排他的特権化をもたらした、と述べる。それゆえに、まず学校が最適のターゲットとなったわけである。なお、日本における教育の心理主義化の問題については、山下恒男『日本人の「心」と心理学の問題』現代書館、2004年に詳しい。なお、本論の直接的な課題からは大きく逸脱するが、先頃決定した「産後ママの乳幼児虐待予防」の福岡方式のマニュアル化と全国への普及は、コーヘンによれば、一世紀前のアメリカで困難かつ不可能であった家族や母子関係への医学化の普及を許容する土壌が、現代日本においてできつつあることを示している（『西日本新聞』2004年12月12日朝刊、第一面トップ記事）。このような予防を主眼とした調査は、当事者が問題と感じていないような領域への介入、問題化を可能とする意味で、これまでの医学、保健領域による関与とは全く異なることは明らかである。
- (3) ポロク『忘れられた子どもたち』勁草書房、1988年（原著1988年）、Shahar, S, *Childhood in the Middle Ages*, Routledge, 1990
- (4) しかし、ならばなぜ日本ではなく英国なのか、と問われるであろう。その答えとして、現段階では次のように述べておく。すなわち、現在の日本社会において教育の場（のみではなく人間関係の場といってもいいかもしれない）を席卷している心理学的思考は、いうまでもなく西洋近代知の認識枠組の上に構築されたものに他ならないからである。その系譜を追うという作業において、ひとまず近代科学の成立に大きな役割を果たした英国社会史をたどることは不可欠である。「心理学的人間の登場」として特筆すべきなのはアメリカ社会であり、日本にお

る教育の心理学化は、主としてアメリカを経由したものであった（注1を参照）。しかし、アメリカ史からこの問題を解きほぐしていくことには限界がある。というのは、以下のような経緯があるからである。著者は先に、19世紀アメリカ、アンテベラム期における母親礼賛言説の氾濫現象について研究を行った。女性の作家による19世紀の母親像は、女性の人生や自己実現、優越感、経済的自立などの理由付けを伴いながら、女性が母親役割に従事することを勧めるものであった。そのような理由付けを伴わなければ論が成り立たないということは、それら書物の人気を支えた女性たちにとって、助言書が説く母親役割はあまり馴染みのないものだったことを示している。しかし、子どもと母親との関係、子育てにとっての母親の愛による教育の重要性、必然性については、疑念を表わしているような表現は見あたらない。乳幼児期の魂と母親の影響力という命題は、抵抗感なく称えられている。あとは、女性がどういう条件でその仕事を義務としていくか、という点が問題であったといえよう。その意味で、後の心理学的親子関係・家族像を用意した母子関係の基礎の一側面は19世紀につくられたといえる。しかし、それは女性がそうした母の仕事を引き受ける社会的条件、あるいは生活上の可能性と価値観の成立であった（野々村淑子「南北戦争前アメリカにおける家庭教育書・育児書の氾濫——「母」礼讃言説の構造とメカニズム——」博士論文（教育学）（東京大学）、2001年）。改めて本稿で問おうとしているのは、19世紀の人々が既に当然視していた、子育てにおける母役割の決定的重要性についての認識の成立・構築過程である。本稿では、その過程が見え始める16世紀から17世紀の、まずはアングロ・サクソン系の精神構造の変容に迫ろうとするものである。

- (5) キース・トマス『宗教と魔術の衰退』法政大学出版局、1993年（原著、1971年）、上巻24頁。
- (6) 同上書、24頁。
- (7) Charlton, K., 'Mothers as Educators', *Women, Religion and Education in Early Modern England*, Routledge, 1999.
- (8) 近代初期英国における母親像についての研究動向については、野々村淑子「近代初期英国における母親像の転回と教育——研究課題の整理のために——」『九州大学大学院教育学研究紀要』第6号（通巻第49集）、2004年
- (9) ヴィヴェスやゲージの教育論に、母の愛は盲目的である故に、子ども（特に男子）の教育にはふさわしくないという記述がみられることは、これまで多くの研究により指摘されてきた。Travitsky, B. S., 'The New Mother of the English Renaissance: Her Writings on Motherhood', in Davidson, C. N., *The Lost Tradition: Mothers and Daughters in Literature*, Frederick Unger, 1980. Rose, M.B., 'Where are the Mothers in Shakespeare? Options for Gender Representation in English Renaissance' *Shakespeare Quarterly*, Vol.42, No.3, Autumn, 1991; King, M.L. and Rabil, A. Jr., 'The Other Voice in Early Modern Europe: Introduction to the Series', in Fantazzi, C. edited and translated., Juan Luis Vives, *The Education of a Christian Woman: A Sixteenth-Century Manual*, Chicago UP, 2000; Whitehead, *Women's Education in Early Modern Europe: A History*, Garland Publishing,

Inc., 1999

- (10) キース・トマス, 前掲書, 3-7頁。
- (11) P.アリエス『<子供>の誕生 — アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』みすず書房, 1980年(原著1960年)。
- (12) Shahar, *op.cit*; Hanawalt, Barbara A., *Growing Up in Medieval London: The Experience of Childhood in History*, Oxford UP, 1993.
- (13) アリエスの『<子供>の誕生』の第一部第一章「人生の諸時期」には, 古代から中世の人々の人生の諸時期の感覚が, 4, 7, 12といった自然の周期を表す数との照応関係にあったことが記述されている。つまり, アリエスは, 中世の人々が子供期の観念をもっていなかったとは論じていない。シャッハー(注3および12を参照)は, アリエスを批判しつつ論じているが, その批判はあたってはいないといえることができる。西欧における人生区分意識の系譜については, 寺崎弘昭・鈴木七美「ヨーロッパ人生区分思想史」『大人と子供の関係史 第一論集』大人と子供の関係史研究会, 1994年。以下のような研究を始めとしていくつかのライフサイクル史研究がなされている。Goodich, M.E., *From Birth to Old Age: The Human Life Cycle in Medieval Thought, 1250-1350*, University Press of America, Inc., 1989
- (14) キース・トマス, 前掲書, 60頁。
- (15) 同上書, 64頁。
- (16) 同上書, 66頁。
- (17) 同上書, 38頁。
- (18) 同上書, 51-52頁。
- (19) 同上書, 49頁。
- (20) Haselhorn, A. M. and Travitsky, B.S. ed., *The Renaissance Englishwoman in Print: Counterbalancing the Canon*, Massachusetts UP, 1990; Comensoli, V. and Stevens, P. ed., *Discontinuities: New Essays on Renaissance Literature and Criticism*, Tronto UP, 1998; Brown, S. ed., *Women's Writing in Stuart England*, Sutton Publishing Limited, 1999; Travitsky, B. S., *The Early Modern Englishwoman: A Facsimile Library of Essential Works, Series I, Printed Writings, 1500-1640: Part 2, Volume 8, Mother's Advice Books*, 2001, and *Series II, Printed Writings, 1641-1700: Part 1, Volume 3, Mother's Advice Books*, Ashgate, 2002, etc.
- (21) 本稿で注目したレイ『母の祝福』だけではなく, ジョスリン『まだ見ぬ子どもへの遺書』, E.グリメストン『雑録, 瞑想, 覚え書き』(Grymeston, E., *Miscelanea, Meditations, Memoratives*, London, London, Printed by Melch, Bradwood for William Alpley, 1604)など, この時期の母の助言書には, ことごとくこのような弁解の言葉が書き込まれていることは, 文芸批評の領域で, 英国ルネサンス期の女性による「新しい母親像」の構築過程を論じたトラヴィツスキーが明らかにしている。Travitsky, *op.cit*.

- (22) Travitsky, *op.cit.* しかし、トラヴィツスキーは、伝統的な女性役割というのみである。女性の家庭性や母性への限定が伝統的ではなく、近代化にともなって成立したことは、母親の社会史研究が明らかにしつつあることである。Crawford, P., 'The construction and experience of maternity in seventeenth-century England', in Fildes, V. ed., *Women as Mothers in Pre-industrial England*, Routledge, 1990などが代表的である。野々村, 前掲論文参照。
- (23) 死後に遺していく遺言として、母の助言書が書かれたことは、タイトルだけからもわかることである。D.レイの助言書も子どもへの遺産、あるいは死後に遺す言葉の贈りもの、つまり遺言を意味する言葉 (legacy) を、タイトルに使用している。以下は、17世紀の女性による母役割についての著作のタイトルである。「遺産 (legacy)」はあらゆる助言書に登場する。Joceline, Elizabeth, *The Mothers Legacie to her unborn childe*, London: John Haviland, 1624; M. R., *The Mothers Counsell, or Live within Compasse. Being the last Will and Testament to her dearest Daughter, which may serve for a worthy Legacie to all the Women in the World, which desire good report from men in this world, and grace from Christ Jesus in the last day*, London: John Wright, 1630 [?]; Richardson, Elizabeth, *A Ladies Legacie to her Daughters, in three books. Composed of Prayers and Meditations, fitted for severall times, and upon severall occations. As also severall Prayers for each day in the Weeke*, London: Thomas Harper, 1645; Bell, Susanna, *The Legacy of a Dying Mother to her Mourning Children, being the Experiences of Mrs. Susanna Bell, Who Died March 13, 1672, With and Epistle Dedicatory by Thomas Brocks Minister of the Gospel*, London: John Hancoke Senior and Junior, 1673; [Anon.], *The Mothers Blessing: Being Several Godly Admonitions given by a Mother unto her Children upon her Death-bed, a little before her departure*, 1650 (?)
- (24) Friedman, A.T., 'The Influence of Humanism on the Education of Girls and Boys in Tudor England', *History of Education Quarterly*, Vol. 25, No. 1/2, Spring-Summer, 1985. ただし、フリードマンは、ルネサンス期の教育革命こそが、リテラシーにおける男女の差別化を生み出したということを示している。
- (25) キース・トマスは、魔術の衰退過程について以下のように述べている。「中世教会が民間の魔術に対抗しようとしたとき用いた方途は、教会魔術という対抗的体系を持ち出し、それに取って代わろうとしたことであった。ところがプロテスタントのとった解決策は、根本的にこれとは異質であった。対抗する万能薬を提供するのではなく、魔術による解決という考え全体を、そういうものとして非難したのである。この点でプロテスタントの成功は一部にとどまった。それはすでに見た通り、たとえプロテスタントの環境にあつてすら、魔術は宗教の中に再び忍び込むことができたからである。しかし、宗教改革は、根本的に新しい方向への前進を開始していたのである。なぜなら、大衆は今やこう教育されたからである。つまり、自分たちの現実の苦しみは、自助と神への祈りとを結びつける以外解決できない、と。魔術の営為のなかに含

まれている代理行為は不敬であり無効であるとして非難された。勤労の精励勤勉という徳目が大いに強調され、それは16, 17世紀のカトリックおよびプロテスタントの宗教教育の著しい特徴になったが、この強調は一つの心構えを反映していると共に、その創造にも一役買ったのである。この心構えとは、魔術の差し出す安価な解決を軽蔑して拒むというものであり、それは単に邪悪だからというだけではなく、それがあまりにもお手軽な解決法だという理由からであった。…人間の労働の可能性を肯定することによって、人々は魔術による解決ではなく、むしろ技術的解決を自らの抱える問題に対してなすように、と促されるようになったのである。」(前掲書, 407-9頁)。先にも述べたように、プロテスタンティズムのみに、このような過程の原因があるとは考えられないし、トマスもそのように論じているわけではない。ここでは勤労の精神とプロテスタンティズムの密接な関係に触れられている。本稿において注目すべきは、こうした魔術による解決が軽蔑視され、「現実の苦しきは、自助と神への祈りとを結びつける以外解決できない」という考え方が主流となっていくことは、母親と子どもとの関係をどのように変えたか、という点である。とりあえず『母の祝福』の著述からみえるのは、儀礼を行う代わりに母の助言書を書き、読むという行為が行われたこと、その著述において祈りを最重要視したということである。自助と精励勤勉の精神が、子育てという事柄において母親に浸透し、以後の母役割礼讃、母の子どもの魂への影響力への全面的信頼、母性の自然化へと展開したのではないかという推測をここでは触れておきたい。もちろん、本論ではそこまでいうことはできない。しかし、確実に、子育てという主題が、母親にとって、「他力本願」ではなく、「祈り」という行為と結びつけられた「不屈の自力本願」(前掲書, 409頁)へと転回する位置に、『母の祝福』を始めとする母の助言書群があることは確かである。

- (26) 本書の初版は、1616年である。しかし、本稿では、BL所蔵のなかで痛みの少ない1627年版(第10版)を使用した。なお、本文中引用の際には、[MB:頁数]という表記に統一する。
- (27) *Oxford Dictionary of National Biography*, Oxford University Press, 2004. ウィンスロップの手紙の内容は、ウィリアムから植民地渡航の際の献金を受け、感謝の意を表しつつも、顔見知りではないため、渡航者リストには加えなかったというものである。
- (28) 目録には、1629年版から1718年版までが第14版との記載がなされている。ブリテイッシュ・ライブラリーの“Integrate Catalogue”を参照した (<http://www.bl.uk/>)。
- (29) *Oxford Dictionary of National Biography*.
- (30) Fraser, A., *Weaker Vessel: Woman's Lot in Seventeenth-Century England*, Arrow Books, 1999, (first published in 1984); 「…妻たちよ、自分の夫に従いなさい。…夫たちよ、妻を自分より弱いものだとわきまえて生活を共にし、命の恵みを共に受け継ぐ者として尊敬しなさい。そうすれば、あなたがたの祈りが妨げられることはありません」 「ペトロの手紙」第3章第1-7節『聖書 新共同訳』(日本聖書教会, 1989年, 以下聖書の和訳はこの訳書による)(強調は引用者による)。注9も参照のこと。
- (31) Charlton, *op.cit.*

- (32) 現に安息日については、パブリックであることを要求している（第43章）。レイが、パブリックな祈りを非難したのは、それが「異教徒のような見せびらかし」に通じるからである。レイは、この点を聖書の一節を引用しつつ論じている。「祈るときも、あなたがたは偽善者のようであってはならない。偽善者たちは、人に見てもらおうと、会堂や大通りの角に立って祈りたがる。はっきり言うておく。彼らは既に報いを受けている。だからあなたが祈るときは、奥まった自分の部屋に入って戸を閉め、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れたことを見ておられるあなたの父が報いてくださる。また、あなたが祈るときは、異邦人のようにくどくどと述べてはならない。異邦人は、言葉数が多ければ、聞き入れられると思ひこんでいる。彼らのまねをしてはならない。あなたがたの父は願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ。」（「マタイによる福音書」第6章第5－8節）[MB：115]。
- (33) 本稿Iの3を参照。
- (34) キース・トマス、前掲書。およびJ.サースク『消費社会の誕生——近世イギリスの新企業』東京大学出版会、1984年（原著、1978年）
- (35) Brown, S., “Over Her Dead Body’: Feminism, Postsuructualism, and the Mother’s Legacy’, Comensoli, V. and Stevens, P. ed., *Discontinuities: New Essays on Renaissance Literature and Criticism*, Tronto UP, 1998
- (36) Crawford, *op.cit.*
- (37) J.マーチンは、ルネサンス期において出現した、新しい人間像、人間理解をこのように表現している。「行為主体、あるいは主体として、自身の発話と行為の指揮者として、内面的自己により強調点をおくような人間理解」である。Martin, J., ‘Inventing Sincerity, Refashioning Prudence: The Discovery of the Individual in Renaissance Europe’, *American Historical Review*, Vol. 102, No. 5, Dec. 1997, p.1331.
- (38) 実際に、『母の祝福』と同時期、17世紀初頭に女性によって書かれた女性論（男性による女性批判の書への反批判書）のなかで、母の行う「教育という第二の出産が私を完全にしたのだ」と、自分の母を讃える箇所がある Wayne, V., ‘Advice for women from mothers and patriarchs’, n.30, in Wilcox, H., ed., *Women and Literature in Britain, 1500-1700*, Cambridge U.P.1996, p.63.
- (39) 近代以前の身体観の歴史については、T.ラカー『セックスの発明：性差の観念史と解剖学のアポリア』工作舎、1998年（Laqueur, T., *Making Sex: Body and Gender from the Greeks to Freud*, 1990）を参照。また、「産む身体」が女性とは限定されていなかったことについては、17世紀から18世紀にかけての前成説論争（生命の起源が卵子か精子かという論争）を詳細に明らかにした次の研究に詳しい。クララ・ピントーコレイア『イヴの卵：卵子と精子と前成説』白揚社、2003年（Pinto-Crreia, C., *The Ovary of Eve*, Chicago UP., 1997）
- (40) この部分は、聖霊が浸透することによってのみ、自らを制する人間となることができるという点について、興味深い記述がなされているので、原文をそのまま転記することにする。...he

(Holy Ghost) will inlighten you, and unite you to Christ, and give you grace to rule over all your affections, and make you able to bee Masters of your selves: where, on the contrary side, they which have not the Holy Ghost written within them, are mastered and ruled by their owne filthy affections, and so become servants to them; but if you have the holy Spirit, ye shall be able to say to your selves, as the Master saith to his servants, Thou shalt doe this, and thou shalt doe that: … (強調は引用者による)

- (41) Juster, S., 'Mystical Pregnancy and Holy Bleeding: Visionary Experience in Early Modern Britain and America', *The William and Mary Quarterly*, 3rd, Ser., Vol.57, Apr., 2000
- (42) ラカー, 前掲書。
- (43) ラカー, 前掲書。Juster, *op.cit.*
- (44) Sigourney, Lydia Huntley, *Letters to Mothers*, 1834. シガニー『母への手紙』については, 野々村淑子「19世紀アメリカにおける女による〈母〉礼讃言説と〈教育〉——リディア・ハントリー・シガニー『母の手紙』(1834)をめぐって」『九州大学大学院教育学研究紀要』創刊号(通巻第44集)1999年。
- (45) Sigourney, *Letters to Mothers*, pp.16-17.
- (46) Goodrich, S.G., *Fireside Education*, 1838. グッドリッチ『炉辺の教育』については, 野々村淑子「19世紀アメリカの家庭教育書と男女の領分——S.G.グッドリッチ『炉辺の教育』(1838)に描かれた子どもへのまなざし」『九州大学教育学部紀要(教育学部門)』第43集, 1998年。
- (47) Goodrich, S.G., *Fireside Education*, pp. 66-70
- (48) Keith, V. Thomas, 'Women and the Civil War Sects', *Past and Present*, No.13, Apr., 1958. デイヴィスも, フランスの新教徒ユグノーのなかで, 女性が果たした役割と, それを支えた靈性における平等性に言及している(ナタリー・Z・デーヴィス「女ユグノー」『愚者の王国 異端の都市』平凡社, 1987年, 原著1975年)。しかし, キース・トマスによる英国, デイヴィスによるフランス, 両国において, それぞれの宗派の体制が確立し, 保守化していくに従って, 再び女性を排除し始めたことも言及されている。
- (49) 中世においては, 聖女や預言者, 神秘思想家として, 聖性に接近した女性が少なからずいた。しかし, 彼女たちは, 世俗の家族関係を断ち切り, 「キリストの花嫁」として聖性の領域に生きた。中世における母であることと, 聖性に近づくことは両立しえないものであったことについては, 以下の研究を参照。Mulder-Bakker, Anneke B., ed., *Sanctity and Motherhood. Essays on Holy Mothers in the Middle Ages*. Garland, 1995

Spirituality and Mother in Early Modern England

Toshiko NONOMURA

This study aims to historicalize the significance of mother's role in early childhood for the personality and life course of the human beings. This idea is the just ideology that controls our modern society and education.

This paper focuses to the most popular of the mother's advice books published in early modern England. It's *Mother's Blessing* written by Dorothy Leigh. She was a pious Protestant mother and wrote advice to her own sons who lost father.

In early modern era, pre-industrial society, people faced various misfortunes and hardships, that is famine, fire, illness, death, and so on. They had belief system and rites for hazards of their insecure environments within church's authorization. But Reformers attacked these customs and beliefs as superstitions.

Several 'mother's advice books' appeared in that period. Leigh never referred to the rites without Sabbath. She advised to her sons about 'praying' only.

K. Charlton's study of early modern mother's role pointed that mothers did religious education. Indeed early modern mothers talked about her children's religious education. But in *Mother's Blessing*, mother doesn't play the concrete and meaningful role for children's education. She only repeats 'to pray privately'.

In *Mother's Blessing*, children are taught by Holy Spirit. Human's self doesn't have clear borders, and is fluid. Its meaning is over flowing to Holy Spirit. Holy Spirit is thought to be in the human. This spirituality governs everywhere in *Mother's Blessing*. Spirituality is the very theme that Reformation made women to be able to access. They become to be able to enjoy equality in spirituality through praying without the mediation of church authorities.

But this brought the important change in the history of motherhood. Mothers become to be involved in the very matter, that is, her children's inner world. Early modern period, only God, Christ and Holy Ghost could enter human's hearts and selves. But by 19th century, mothers would be thought to have the natural power for children's soul. They would play the role on behalf of God.